

| | |
|---------|-------------------------|
| 氏名(本籍) | 伊里綾子(神奈川県) |
| 学位の種類 | 博士(心理学) |
| 学位記番号 | 博甲第6569号 |
| 学位授与年月日 | 平成25年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | 抑うつ傾向と情報処理過程におけるバイアスの関連 |

| | | | |
|----|---------|---------|------|
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士(心理学) | 濱口佳和 |
| 副査 | 筑波大学講師 | 博士(学術) | 望月聡 |
| 副査 | 筑波大学助教 | 博士(心理学) | 大谷保和 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士(心理学) | 綾部早穂 |

論文の内容の要旨

(目的)

情報処理過程において処理される情報の偏り(バイアス)は抑うつ症状の生起・維持要因となると考えられている。情報処理過程の中の注意処理に関するバイアスは、外的な刺激に対する空間的注意(外的注意)におけるバイアスと、ワーキングメモリ内の表象(内的注意)に対するバイアスに区別され、両者において抑うつ者はネガティブバイアスを示すことが先行研究で示唆されてきた。本研究では、外的注意と内的注意を包括的に捉え、注意解放におけるバイアスや記憶段階におけるバイアスなど、情報の入力段階におけるバイアスと抑うつ傾向の関連や、外的注意と内的注意の切り替えおよびバランスと抑うつ傾向との関連を明らかにすることを目的とした。

(対象と方法)

研究1～6において、総計150名の非臨床群の大学生・大学院生を対象としたアナログ研究を実施した。研究1・2では修正版ギャップ・オーバーラップ課題、研究3ではネガティブ語とポジティブ語を含む漢字二字熟語の再認課題、研究4・5では新たに作成された外的・内的注意切り替え課題、研究6では連想課題とGo-Nogo課題の二重課題がそれぞれ実施された。すべての課題における実験参加者の抑うつの程度がBDI-IIで測定された。

(結果)

研究1～6における全実験参加者のBDI-II得点の中央値が8点であったため7点以下の者を抑うつ低群、9点以上の者を抑うつ高群とした。研究1において抑うつ低群は刺激全般からの能動的注意解放特に喜び語からの注意解放が遅延し、研究2において抑うつ低群は刺激提示時間100msの条件で、刺激全般からの能動的注意解放が自動的注意解放に比べ速くなっていたが、抑うつ高群にはそのような効果がみられないことが示された。抑うつ低群はポジティブ刺激を中心としたあらゆる刺激に対し、注意処理後期段階まで注意を維持させ、注意処理初期段階で不必要な情報への注意を能動的に抑制することができるが、抑うつ高群は注意処理後期段階まで外的刺激に対する注意を維持できず、また感情喚起刺激の注意処理初期段階の処理を能動的に抑制できないことが示唆された。研究3において抑うつ低群ではポジティブ語の前後に提示された語

の再認に要する反応時間が他の語に比べ短くなっており、ポジティブ刺激への注意によってその周辺情報の記銘を促進させることができるが、抑うつ高群にはこのような効果はみられないことが示された。研究4において抑うつ高群と低群に差はみられず、参加者全般において、ネガティブ語提示時に自己関連条件よりも形判断条件で反応時間が遅延し、ニュートラル語提示時に形判断条件よりも自己関連条件で反応時間が遅延していた。一般的にネガティブ刺激については内的注意に基づく処理を行いやすく、ニュートラル刺激については外的注意に基づく処理を行いやすいことが示唆されたが、課題を再検討して実施した研究5では群間に差が認められ、抑うつ高群はポジティブ語の形判断からニュートラル語の自己関連判断への切り替えが遅延し、抑うつ低群にはこのような遅延はみられなかった。抑うつ高群は環境にポジティブな刺激があっても、それによって生じる思考や感情体験などへ注意を切り替えにくいことが考えられた。研究6では抑うつ高群と低群の課題の成績に顕著な違いはみられず、課題の方法論的な点においてさらなる検討を要すると考えられた。

(考察)

本研究から、非抑うつ者にみられるポジティブ刺激による外的・内的注意処理の促進が抑うつ者にはみられず、抑うつ者はポジティブ刺激にさらされることで生じる思考や体験への注意が抑制されやすいと考えられた。こうしたポジティブバイアスの欠如は抑うつ者における失快感情と関連しているとも考えられた。また、抑うつ者はあらゆる刺激に対する外的注意を維持できないため、ワーキングメモリの情報が更新されにくく、さらに気分改善のために能動的に処理する情報を選択することも困難であるためにネガティブ気分が維持されやすい可能性が示された。なお、本研究では抑うつ者のネガティブバイアスは検出されなかった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究において示されたポジティブバイアスの欠如の形成過程や変容可能性、抑うつ傾向との因果関係、特性不安との異同、生態学的妥当性の検討などいくつかの課題を残しつつも、抑うつ傾向と外的・内的注意を複数のオリジナリティを有する実験課題において緻密に検討し、情報処理過程におけるポジティブバイアスの欠如と抑うつ傾向の関連を実証的に示した点、従来の知見に比し抑うつ症状の生起・維持要因となる情報処理過程を詳細に明らかにした点において意義のある研究と評価できる。

平成25年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。